目　次

はじめに……4

Ⅰ　ことばから迫る狂言論　小林千草

狂言台本のことばは〝何を物語るのか〟

第一章　狂言のオノマトペと狂言台本……8

第二章　大蔵虎明本「武悪」の表現論的考察
——〈冒頭部〉を虎寛本・現行本と比較する——……13

大蔵虎明本狂言の復元の意義と実践からわかること

第三章　大蔵虎明本「河原太郎」復元考——〝室町の特徴的な音韻とことば——……42

第四章　大蔵虎明本「河原太郎」復元本文と国語史的考察……64

狂言と中世資料を有機的に解釈する試み

第五章　『大かうさまぐんき』と狂言「萩大名」——狂言的世界が日常的にあった中世——……106

第六章　狂言「獅子聟」と信長の聟入り……126

狂言会話の社会言語学的分析

第七章　狂言に反映された働く女のことば――「れんじゃく」より――……137
第八章　狂言の夫婦コミュニケーション――「ひげやぐら」より――……153
第九章　狂言の女たち――言語生活の分析から発して――……185

Ⅱ　狂言鑑賞の新視点

千草子

第一章　狂言こだわり入門……238
一　見ているだけでおもしろい――「二人袴」「附子」「棒縛」「樋の酒」など……238
二　音がおもしろい――「神鳴」「連歌盗人」「鐘の音」など……241
三　恰好がおもしろい――「蚊相撲」「唐相撲」「首引」など……246
四　子方がかわいい――「靭猿」「金津」「居杭」など……251
五　女の人がたのもしい――「河原太郎」「千切木」「ひげやぐら」など……256
六　ちょっと考えさせられる――「布施無経」「瓜盗人」「釣狐」など……260
第二章　狂言を楽しむ――狂言万華鏡――……266
一　笑えぬ狂言――「米市」……266

二　狂言「釣狐」に想う……268
三　正調狂言のおもしろさ――第四回「狂言の会」鑑賞私記……270
四　「新進立合狂言会」鑑賞私記……273
第三章　狂言に足をはこんだ観客へのいざない……278
一　狂言は人間学入門書である――「布施無経」……278
二　さあ、ヒットパレードを聞きましょう――小猿の舞う「室町小歌」……280
三　四匹目（よんひきめ）の狐に、幸いあれ……282
第四章　狂言応用編――旅に出よう！……286
一　狂言と花の都（新京都案内）　春の巻……286
二　狂言と花の都（新京都案内）　秋の巻……297

おわりに……308
あとがき……314

〈巻末付録〉能舞台図と基礎的参考文献……317～319

第一章　狂言のオノマトペと狂言台本

一　オノマトペに関する意外な真実

狂言はオノマトペ（音表象・擬声擬態語）が豊かである――これは嘘ではない。しかし、江戸後期から現行狂言に至るまでに演出効果上、強調されたという事実が意外にかえりみられていない。

たとえば、「連歌盗人」。この曲は、貧しいくせに家業をおろそかにして連歌道楽の男二人が、連歌の会の頭（主催者）の役をこなすために、富裕な他人の家にしのびこむ（つまりは盗みである）場面を前半に有している。

他家にしのびこむ時の第一の障害は、塀。狂言の反映する時代相としては、竹垣や柴垣・葭垣が考えられる。その塀を切り破る際を、最も古い狂言台本である大蔵虎明本狂言台本[*1]（一六四二年書写本成立）では、

「づか〳〵と、二つきるまねする」

と記している。それを江戸時代後期（一七九二年書写）の大蔵虎寛本狂言台本[*2]では、

「ずか〳〵〳〵、ずか〳〵〳〵、ずか〳〵〳〵〳〵ずつかり」

と、増幅させている。それだけではない。虎寛本では、「めり〻〳〵〳〵〳〵〳〵」と、葭垣を引きめくるオノマトペまでつけ足されている。また、屋敷内にしのびこんで最初の戸障子を開ける際の詞章は、虎明本の

「戸をあくるまねをして　さら〳〵」

に対して、虎寛本は、「さら〳〵〳〵」と反覆の数が増え、かつ、さらに奥の戸をあける際の「さら〳〵〳〵」まで描写されている。

もちろん、狂言が口承をもちまえとし、文字として固定されたのが江戸初期であることを考慮する必要はあろう。しかし、室町は、抄物に象徴されるように、オノマトペが学問の場にさえ堂々と登場していた時代である。そのような背景にあっては、現行狂言のようなオノマトペ強調は、かえって効果がない。むしろ、ある程度におさえ、田楽・猿楽以来のパントマイム（しぐさ）に専念した方が人々の心を魅きつけたものと考えたい。

近世もかなり進み、オノマトペが室町的色彩をかげらせてきた時、室町らしさを演出するために、